

今月のみことば 2017年8月

「彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。」 (イザヤ書 2章4節)

特攻機から新幹線の設計へ



1941年12月8日、日本はハワイの真珠湾における奇襲攻撃に成功し、大国アメリカに対して、断然優勢な立場を獲得した。なかでも、零戦の活躍はめざましく、まさに向かう所敵なしの状態であった。

しかし、それからわずか半年余りして、日本はミッドウェーの戦いで致命的な損失を被った。航空戦に欠かせない空母を四隻も失ったばかりか、何百機という零戦、またそこに搭乗した熟練パイロットを一挙に失ってしまったのである。戦況は日を追うごとに悪化した。そして、起死回生をかけて軍部が考案した作戦こそ、九死一生ではなく、十死零生といわれる、生還を想定しない特攻作戦で

あった。特攻であるなら、熟練パイロットでなくてもよいからである。この作戦で約4千名の若人が命を失った。

戦況が一層絶望的になる中、東京帝大工学部を卒業し、海軍技術少佐をしていた三木忠直に新たな命令が下った。それは一式陸攻という輸送機の胴体に取り付け、1.2トンの爆弾を搭載して猛スピードで敵艦に体当たりさせるロケット戦闘機「人間爆弾・桜花」の設計である。

三木は生還のありえないこのような機体の製作を拒否するが、聞き入れられるわけもなかった。そして桜花は製造され、多くの若者が犠牲となった。

戦後、三木は激しい罪の呵責で悩み苦しんだ。その頃、クリスチャンであった母、妻の勧めにより、著名な聖書学者でもあり伝道者でもあった渡辺善太の門を叩く。そこで「**凡て重荷を負ひて労苦せる者我に来たれ。我汝等を休ません(マタイ伝 11:28)**」の聖書のことばに接し、後日、洗礼を受け、クリスチャンとなった。

高性能爆撃機「銀河」(1,100機製造)もふくめ、自分が設計した専用機で多くの若者を死なせたことを悔いた三木は旧日本国有鉄道(現在のJR)の「鉄道技術研究所」に勤める。自動車関係にいけば戦車になる。船舶関係にいけば軍艦になる。そこで平和利用しかできない鉄道の世界に入ることにしたのである。

おりしも、鉄道は飛行機に遅れをとり、移動手段としては時代遅れとみなされ始めていた。しかし、三木は「飛行機の形を列車に持ち込み、車体を流線型にし、軽量化すればスピードは向上し、最高速度は200キロを超える」と断言した。海軍時代の同僚の協力を得て、0系新幹線は誕生した。驚くべきことは、そのフォルムが桜花に似ていること、そして生還率ゼロであった桜花とは対照的に、新幹線は今まで一人の死者も出すことなく世界で最も安全な乗り物とみなされていることである。

もし三木が神と出会わなかったら、果たして新幹線は誕生していただろうか。改めて聖書のもたらす大きな影響力を思わずにはいられない。(文中敬称略)

